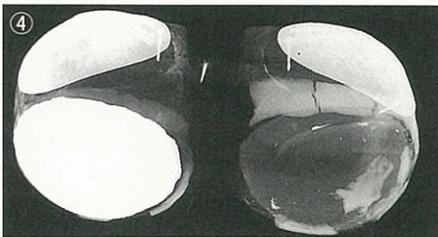
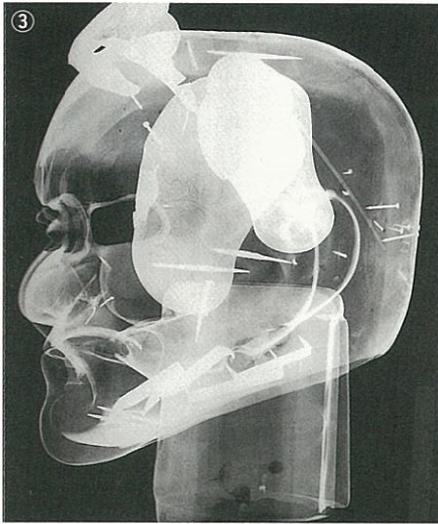


荒川ふるさと

文化館だより

荒川区教育委員会
荒川ふるさと文化館
荒川区南千住6-63-1
TEL 03(3807)9234
登録 (16)0023-2号

文化財 NEWS速報 山車人形の精密検査!?



幕末から明治のころまでは、荒川区内でも雄壮で華麗な山車人形がいくつも曳き回されてきました。そのころの山車人形が3体(写真①)伝わっています。

古川長延作の山車人形 2体は旧三河島のみなさんが守っています。稲田姫(荒川四丁目西仲睦会・荒川文化会・大西町会・荒川宮地町会蔵)と熊坂長範(荒川中央町会蔵、写真②)です。稲田姫は多くの山車を手がけた人形師古川長延によるもので幕末から明治初期の作と推定されます。頭・衣裳・高欄・幕などほとんどが当初の状態が残っています。熊坂長範は、明治時代の人形で古川長延作と伝えます。もう1体は、諏方神社(西日暮里三丁目)の鎮西八郎為朝です。近年修復されていますが、やはり古川長延作といわれています。

熊坂長範の健康診断 このうち熊坂長範の目の調子が思わしくないので、専門の先生にお願いして健康診断をして頂きました。

まず、長範の頭と目玉を診察。目玉の中の様子や頭への取り付け具合は外見では分かりませんが、レントゲン撮影(写真③④)もしました。すると長範の既往症が明らかになったのです。まず、飾りが落ちないように、またあちこちの負傷を直すのに金属の釘が使われていることが分かりました。さすがの長範も、毎年曳き回されては、あちこちにガタがくるものです。頭の後ろには、目玉を動かすカラクリの紐を通したと推定される穴が開いていました。今残っている古川長延の作品のなかでカラクリの事例は他にないので、大変貴重なのだそうです。

目から胡粉? 問題の目はどうでしょうか。長範は表情を変えるため2種類の目をもっています。一方の目は白に黒目でガラスがはめられています。もう一方は金に黒目でガラスはありません。レントゲンに写った目は、一つが真っ黒でした。この黒い影は何か? 先生のお見立ては「レントゲンに写るのは、金属とカルシウム。人形の目の彩色等には胡粉(ごう)が使われていますから、白く写るのです。黒いということは、胡粉を塗った箇所が壊れてしまったことを示しています。どうも綿等を詰めて目玉を書き込んだようです。今後は、応急手当ではなく、じっくりと治療することが肝要です」との診断でした。

健康診断をすませた熊坂長範は、更に大切に守られることになりました。稲田姫とともに、平成16年度区指定有形民俗文化財になったのです。

〈野尻かおる〉



背が伸びたお地藏さん

ご存知、小塚原の首切地藏（南千住五丁目・延命寺境内）今さら紹介するのもなんだが、この地藏の背（座高）が伸びている、と言ったら皆さんはどう思いますか？

江戸時代の記録、例えば「新編武蔵国風土記稿」には、高さ1丈（約3m）とあるが、『荒川区の文化財』(一)では、1丈2尺とあり、60cmほど伸びていることになる。蓮台や請花は、それぞれ60cm以上はあるから、含むか、含まないかの問題ではない。また、誤差と考えるには、数値が大きすぎる。も



①武州豊島郡千住小塚原の地藏菩薩（明治6年）
Image of Jiso Bosatz Toshimagori Senji, Kotsukuhara, Bushiu
〔THE FAR EAST.〕 Vol. III, No. XX. [1873.3.17]
横浜開港資料館所蔵

ちろん、自然に伸びた、なんてことはあるはずもない。

写真①と②をよくよく見比べてみると、地藏の姿は微妙に違う。

この地藏は、27個の花崗岩を組み合わせて造られたものとされているが、写真②では、上から肩部十腹部A十腹部Bであるのに対し、写真①では、肩部十腹部Bとなっている。腹部Aがない。まるでダルマ落し。安政2年（一八五五）の大地震の時にも恙なかつたというほど丈夫な地藏である。地震か何かで、崩れた時に組み忘れた、とも考えられない。

実は次のようなことがあった。今から200年ほど前の享和年間（一八〇一〜〇四）に、「御目障」ということで、1丈余から1丈に縮められたというのである。一つの可能性ではあるが、その理由を知るため当時の回向院の言い分（『天保撰要類集』）に耳を傾けてみよう。



②烈士殉難烈士遺跡絵葉書／当館蔵
「小塚原地蔵尊并山田浅右衛門使用之名刀」
〔大正9〜昭和6（1920〜31）〕

a 御仕置場辺は一円御成場ニ而平生共物事目立候儀は御目障二付、相慎罷在
b 御成場所故志丈余り之品は御目障之由申伝候

要するに、仕置場周辺は、将軍が来訪する「御成場」だから、1丈以上の構造物は不認可、という規制を回向院は慣習的に守ってきたというのである。

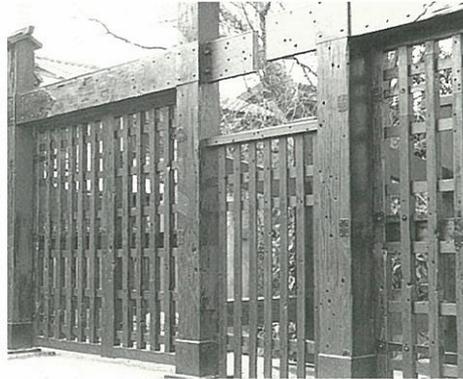
では、背を縮めさせた「犯人」は：こままでくれば明らか。引用資料 a・b に出てくる「御」の字は、将軍に対する敬意を示すので、間接的には将軍ということになる。

さて改めて実物をみると、腹部Aは新たに作ったように見えないう。どこかに保管されていたのであろうか。もともと、元の（＝現在の）座高に戻ったのが、いつのことかも調べがたい。だが、「目障」などといったような將軍がいなくなった明治の世であるのは確かである。（亀川泰昭）

* 資料 a・b は、「天保撰要類集」165（国立国会図書館蔵）。また「隅田川とその兩岸」補遺上巻を参照した。

文化館おすすめ

史跡めぐりコース① 幕末編



旧上野の黒門／円通寺所蔵

日暮里出身の作家、吉村昭氏が朝日新聞の夕刊で「彰義隊」と題した小説を連載している。2月には、輪王寺宮（東叡山寛永寺主）が三河島から尾久へと落ち延び、村人たちが御領主様である宮様を助ける姿を詳細に描写していた。それに刺激されただけではないだろうが、何かと彰義隊ゆかりの史跡に関する問い合わせは多い。そこで今回は、幕末関係の史跡めぐりのコースを紹介しよう。

なんとといっても見所は、南千住一丁目の円通寺だろう。慶応4年（二八六八）、円通寺住職仏磨と寛永寺御用達商人の三河屋幸三郎は、累々と横たわる260余人もの彰

子どもの「から見たあらかわ②」
**子どもたちの
 博物館見学**

荒川ふるさと文化館では、展示や講座などを通じ、多くの人たちに向けて荒川区の歴史・文化に関する情報を発信し続けている。来館者には子どもたちも多く、その反応や感想・質問に、ときに意表を衝かれることがある。

昨年の秋、区の無形文化財である伝統工芸技術の職人さんたちの作品を館蔵資料展で展示した。そのとき、こんなことがあった。
子どもたちの視点

ある日、小学生が、展示していた仏壇（飯岡時三郎さんの作品）を見て「仏壇の中に紙くずがある」と言ってきた。確かめてみると、仏壇の開きの奥に保護用の紙が挟まったままであった。むろん本来ならば、展示の時にすべて取り払うもので、これは展示作業上の単純なミスである。

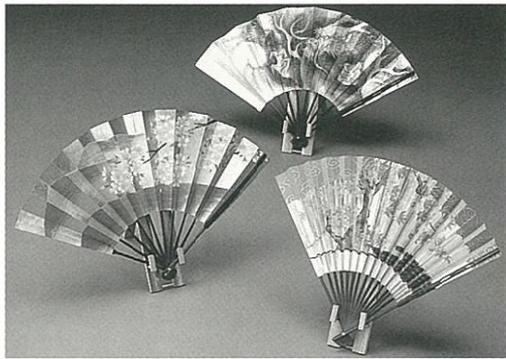
しかし展示ケースに収まった仏壇の奥を覗くには、かなり低い位置からではないと難しい。小学生たちは、おそらく屈み込むようにして展示を見ていたのだろう。展示をする側も、子どもたちに

色々なことに「気付いて」欲しいと思っている。それが展示の目的のひとつでもあり、より効果的に見せるために照明や作品の配置にも細心の注意を注ぐ。しかし反対に、今回の一件では、子どもたちが、予想もしない視点で展示を見ていることに「気付かされ」た。
子どもたちの質問から

また、ある子からは、こんな質問も寄せられた。

「展示室に飾られている扇子『中啓 桜と紅葉』（故深津鉦三さんの作品）は本物ですか？という問いである。」

数ある工芸品のなかでも「桜と紅葉」の図柄が描かれた扇子は、とりわけ鮮やかで目を引いたのだろう。
 この質問に回答するにあたって



写真奥：『仕舞扇／龍・桜』
 写真手前(2点)：『中啓／桜と紅葉』／当館蔵

は、まず、展示した扇子は職人さん手作りの本物であることをしっかりと伝えなければ、と考えた。なぜなら博物館とは「本物」を見ることができるところだからだ。

さらに、ここに本物が展示できるといことは、こうした扇子を作ることもできる、すぐれた技を持つ職人さんが、みんなと同じ町に住んでいるからで、実はとても身近な存在なのだということを知ってほしいとも思った。

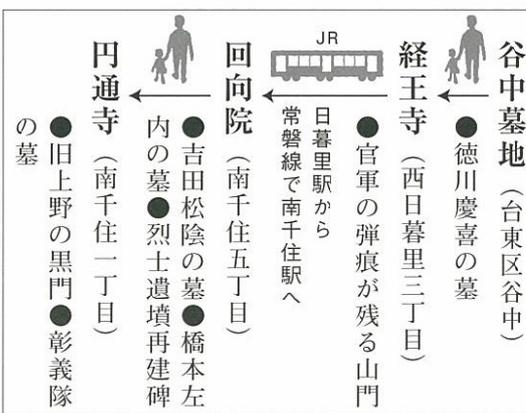
展示されている扇子を見て、それが本物かどうか疑問に思ったその子は、ひよつとしたら、将来伝統工芸のすごい「目利き」になるかもしれない。そんなきっかけを提供できる展示ができたなら、専門職冥利に尽きるというものである。
 〓 弥永浩



あらかわの伝統技術展会場にて
 子どもの目には何が映っているのだろうか。

義隊士たちの遺体を、官許を得て火葬の上、円通寺に葬った。それが、境内にある彰義隊の墓（都指定旧跡）である。また、寛永寺にあった八門の一つ、黒門（区指定文化財）も明治40年（一九〇三）に境内に移築された。上野戦争の際の弾痕が数多く残り、戦闘のすさまじさが偲ばれる。その他、榎本武揚えのもとたけあきの碑などもあり、まさに幕末文化財の宝庫である。
 基礎コースに皆さんなりのアレンジを加えてまわってみてはいかがだろうか。
 〓 加藤陽子

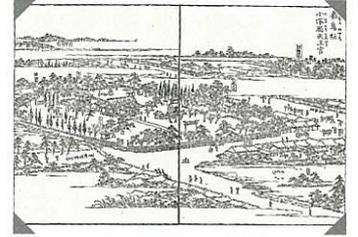
おすすめ基礎コース



※寺院の境内に入る際には、事前にご連絡の上、所有者あるいは管理者の指示に従ってください。
 ※一般参拝者の方もいます。周りの人に迷惑がかからないように静かに鑑賞しましょう。

地名のつぶやき

⑨南千住のアイデンティティ 〈下谷通新町の証〉



〔江戸名所図会〕／当館蔵

＊登場人物＊

今回も登場おしゃまな南千住(116歳)と
これまた相当年上の養子・下谷通新町

—南千住六丁目の素盞雄神社にて—

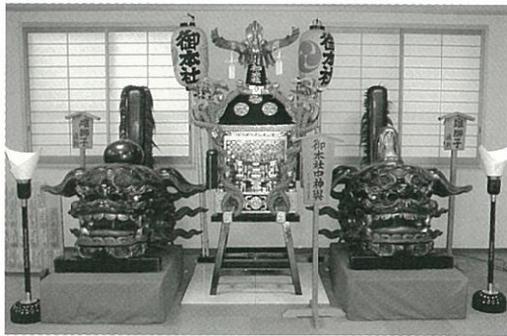
今日は、満開の桃の下で、自分探しの仕上げをしようと思っっているの。それで天王さまの少し南に住んでいる下谷通新町ちゃんと待ち合わせているの。下谷通新町ちゃんは何でも、犬將軍が治めていた元禄時代のころ生れたらしいわ。

—下谷通新町の姿を見つけて—

こっちこっち、下谷通新町ちゃん。ねえ、あなたが生れたのはいつなの？

—照れくさそうに—

なんだい、会う早々に。前世は、小塚原新町という町だったときいているよ。生れ年は元禄8年(一六九五)の亥年さ。下谷通新町という地名はどうして付いたって。いろいろ考えてくれる人がいたものだね。『角川日本地名大辞典』



文政9年銘獅子
頭と尾からなる雌雄一对の獅子。大きさ等から3人以上で獅子舞を演じたと思われる。

という本を見ると一奥州道裏道沿いの地なので、(前世の)小塚原を通にあらためた」というんだよ。要するに「下谷通り」—今の国道4号線—に沿ってできた町ということ。頭と左右の腕は小塚原町、左右の足は三ノ輪に接しているんだ。だから、こんなに縦長でスリムな体型なわけよ。

—興味深そうに—

ねえ、ねえ、下谷通新町ちゃん。お祭りの時に出る立派な御獅子があるよ。

—記憶の糸をたぐって—

たしか、文政9年(一八一六)6月のことだった。数え132才の頃、雌雄一对の獅子を造ったんだ。玉のようなものをのせているのが雌獅子で、角がついているのが雄獅子さ。これがその時の獅子



出羽三山供養塔
素盞雄神社所蔵

頭だよ。

—驚いた顔をして—

えっ、そんな古い御獅子が今でも残っているの。

—獅子の前に誘って—

すごいだろ。それに、見てもらえ。そこに何か書いてあるだろう。それが私を一人前にしてくれた人たちさ。

—文字を目で追いながら—

えーと、雄の方には「家持世話人 氏子中 大広屋治左エ門 小林仁右エ門 山城屋弥太郎 佐野屋平吉 箔屋惣八 伊勢屋新六 伊勢川八兵衛 湯屋栄助、文政九年戌年」、雌の方には「下谷通新町上丁氏子中、世話人 大広屋金治郎 鷺 又右衛門 同 勝五郎 若者中、文政九年丙戌年」、うわー、大勢の名前。中心は大広屋治左エ門さんだったのね。大広屋のああ知っている。こっちの、芭蕉の句碑の隣にある出羽三山供養塔に「小林治左右衛門・小林仁右衛門」ってあるのが大広屋さんよね。文政10年って書いてあるわ。公春院さんの石の井戸側も町の人たちが

文政6年に奉納したものだよね。
—懐かしそうに—

ああ、あのころは若かったよ。町が発展することだけを考えると前進あるのみの時代だった。明治11年(一八七八)には真正寺門前町くんを体の一部にしたものだよ。でも、明治22年には南千住ちゃんの一部になっちゃった。
—励ますように—

なにいつてんの、町会の名前「通新」として立派に伝えられている。それに、あなたの歴史が刻まれた文化財がこんなに残っているじゃない。下谷通新町ちゃん、あなたが私の一部になってくれたことを誇りに思うわ。
—未来に向かって明るく—

そうか、これまでここで生れた地名の歴史(「地名のつぶやき」⑤⑥⑦参照)をあたしは受け継いで来たのね。そしてこれからも伝えていくことが、使命なのよね。
—野尻かおる—

【参考文献】『御府内備考』1(大日本地誌大系)、『南千住の民俗』、『荒川区史』上、『角川日本地名大辞典』

計 報

荒川区指定無形文化財(本地指物)保持者、浅井輝夫氏(享年81歳・東尾久は、平成16年11月2日に逝去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。